

プラ被覆なし肥料普及へ

流出防止し収量確保も

茨城県のJA北つくばは、プラスチック被覆をしない肥料の普及に2025年度から乗り出す。水稲「コシヒカリ」の収量改善の取り組みの中で、プラ製の流出防止にも同時に着手した。3年間の実証で、慣行の二発肥料と同等の収量を確保。来年度の生産に向け提供を開始する。

みどりの一歩

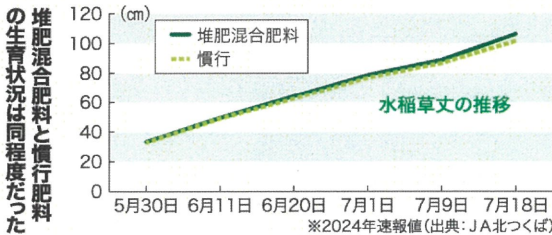
JA管内の水稲作付面積は約7400ha。担い手への集積が進み、追肥が不要な二発肥料の使用が一般的だ。しかし、地力の低下や、地球温暖化によるプラ製の溶け出す時期のずれによって、主力品種



試験圃場（ほじょう）の生育状況を確認する関係者ら（JA北つくば提供）

実証に使った肥料のポイント

- プラ製を使わず海洋流出問題に対応
- 堆肥を含み、土壌改良効果に期待
- 粒状で田植え同時散布が可能



の「コシヒカリ」の減収が課題となっていた。収量改善を目指す中、プラ製の海洋流出問題にも取り組み、新たな資材の実証試験を22年に始めた。JA全農いばらき、県農業研究所、筑西地域農業改良普及センター、資材メーカーが協力する。

使用した資材は「新マトリックス有機SBR」。緩効性化成肥料と堆肥を混合したチックを使用した被覆肥料に

業界挙げて取り組み

JA全農と全国複合肥料工業会、日本肥料アンモニア協会は22年、「30年にはプラスチックを使用した被覆肥料に

もので、土壌改良効果が期待でき、プラスチックを使っていないのが特徴だ。粒状で慣行の一発肥料と同じように田植え同時散布する。3年間、「コシヒカリ」で

慣行の肥料との生育の違いなどを試験。窒素成分で同量を散布したところ、慣行と比べ生育は遜色なく、収量も同等だった。3年目となった今年

は、筑西市の基準収量10t/haあたり540kgに迫った。試験当初から協力する水稲農家、渡邊孝之さん(77)は「慣行と変わらず使える」と実感。「今は農業も環境に配慮したものに変えていくこ

の開発や普及を進める。農水省も25年の概算要求に、流出対策に関する事業を引き続き盛り込んでいる。(長野郁絵)